

塚原遺跡は、主に北側が弥生時代中期から後期の生活域でしたが、古墳時代になると南側に生活域が変わり、中期になると古墳が築造されるという変遷がわかります。

■古墳時代前期

～弥生の住居スタイルを引き継ぎ、鉄器を多く有する集落～



竪穴住居(S192)から出土した多量の土器



竪穴住居(S192)出土の土器

調査区南側においては、古墳時代前期の竪穴住居跡が 14 基確認されました。その形態は、弥生時代後期とほとんど変わらず、2本柱にベッド状遺構をもつというスタイルでした。

住居跡からは鉄器も多く出土しており、特にS197からは約70点もの鉄器（鉄鍬・刀子など）が出土しています。また、S360からは滑石製の勾玉やガラス玉が検出されなど、集落の性格を考えるうえで注目されるものです。



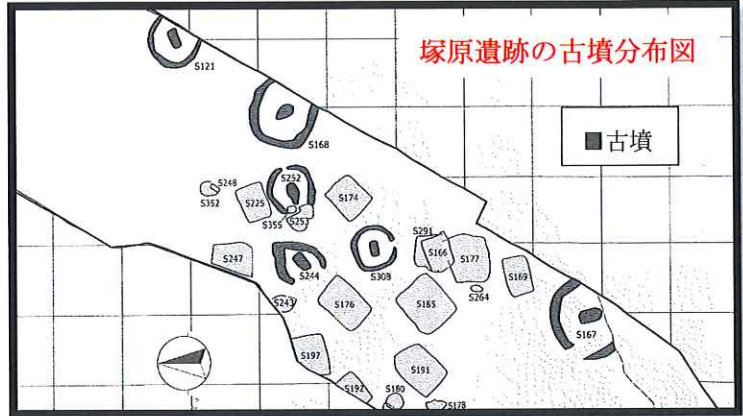
竪穴住居跡 (S360) 出土の勾玉

■古墳時代中期

～菊池川下流域初の石棺系石室をもつ古墳群～

古墳時代中期になると、調査区南側に古墳群が形成されます。全体で6基の円墳が検出され、うち2基は主体部が消失していましたが、他の4基は「石棺系石室」を主体部としており、菊池川下流域では初の発見例となりました。いずれも盗掘を受けていましたが、副葬品として鉄器（鉄鏃・刀子）や玉類（滑石製白玉・ガラス玉）が出土しました。これらの古墳は、周溝内出土の土器から5世紀中頃に築造されたと考えられます。

「石棺系石室」とは？
北部九州を中心に分布するもので、県内では山鹿市や宇土市などで確認されています。



S121 (円墳・石棺系石室)



S167 (円墳・石棺系石室)



S308 (円墳・石棺系石室)



滑石製白玉・
ナツメ玉



鉄鏃・刀子

S121 の副葬品

ガラス玉



鉄鏃

S167 の副葬品



S168 周溝出土の土器